

学習者の特性の理解

聖徳大学生涯教育文化学科

西村美東士 <http://mito3.in.coocan.jp>

学習目標

- ① 学習者間の違い→説明できる
- ② 学習者内の変化→説明できる



個々人の成長と癒し(原点回帰)の
パターンに対応できる支援者になる。

問題の所在

学習は本来、個人的事象



×「一斉集団承り型学習」



違いのわかる支援者として

学習特性決定要因

属性による
特性の差

世代
コーホート
性別
仕事

これって、指導者や学習者にとっての「ラベリング」につながるのか？

個人による
特性の差

社会化・個人化達成度

社会化と個人化

社会化

① ~~✕~~ 個人の意思を超えた社会の作用
② 個人の社会的能力の獲得過程



個人化

① ~~✕~~ [社会化に抵抗する個人の作用]
② [個人の個人的能力の獲得過程]

個人化の問題

- ①「積極的な個人本位」の可能性もあるが、「個性や個人差の強調」が、「情緒的で矮小化された私的自己本位的性格を帯びる」。(柴野昌山『しつけの社会学—社会化と社会統制』, 世界思想社, 1989年。)
- ②「(職業の)自己選択・自己責任」については、「ライフコースの個人化と問題解決の私化」と同様の問題を抱えており、「何がやりたいことなのかを自問自答するなかからは、やりたいものをみつけることはむずかしい」。(宮本みち子『若者が《社会的弱者》に転落する』, 洋泉社, 2002年。)
- ③「自分が好きに決めればいい」、「他の人に迷惑をかけなければいい」という道德律しか個人を縛るものがなくなり、その結果、さまざまな選択が容易に自分の好みの問題にすり替わってしまう。(坂口緑「個人化のすすむ現代社会」, 生涯学習研究e事典, 2008年)



「個性尊重教育」は不要なのか。そうではないだろう。
では、どうすればよいか？

教育のもつ社会化機能への疑い

- ①学校という制度の「教えられ、学ばされる」という関係から、「自ら学ぶ」という行為を取り戻すために、学校という制度を乗り越える。(イヴァン・イリイチ, "Deschooling Society", 1971年。日本語訳は、『脱学校の社会』, 東京創元社, 1977年。)
- ②「子どもたちは目の前にぶら下げられた「人参」である教育目標自体を疑問視しているし、到達しても「人参」はないだろうと疑っている。ここにおいて「教育」「育成」「指導」という用語と手法が、子ども、若者の世界で無力化しつつある」。(田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』, 学陽書房, 2001年。)



教育は、「教育目標」や「社会化機能」を失えば、存在意義を失う。では、どうすればよいのか？

個人の「花の生涯」にとって重要な 癒しの「原点回帰」機能

逃げる

エスケープ

- ・ スレッサーからの緊急避難

見つける

オリジン

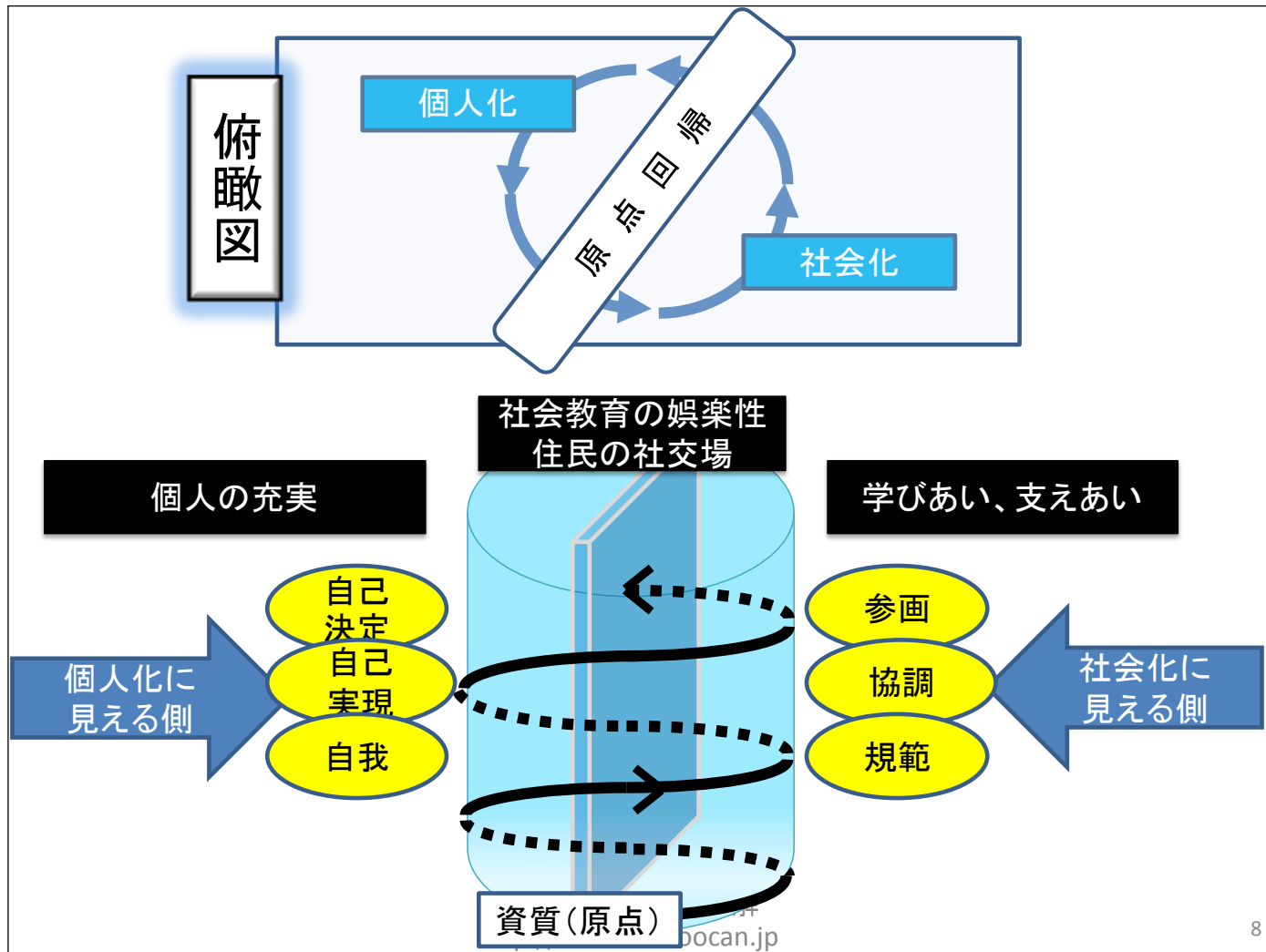
- ・ 子ども心や原風景の回復等による自己確認

ふれあう

ネットワーク

- ・ 人的交流による心のふれあい

個人化・社会化・原点回帰のプロセスモデル



教育の目的 —教育基本法より—

人格形成

人格の完成を目指し、

個人化に
つながる！

社会的能力

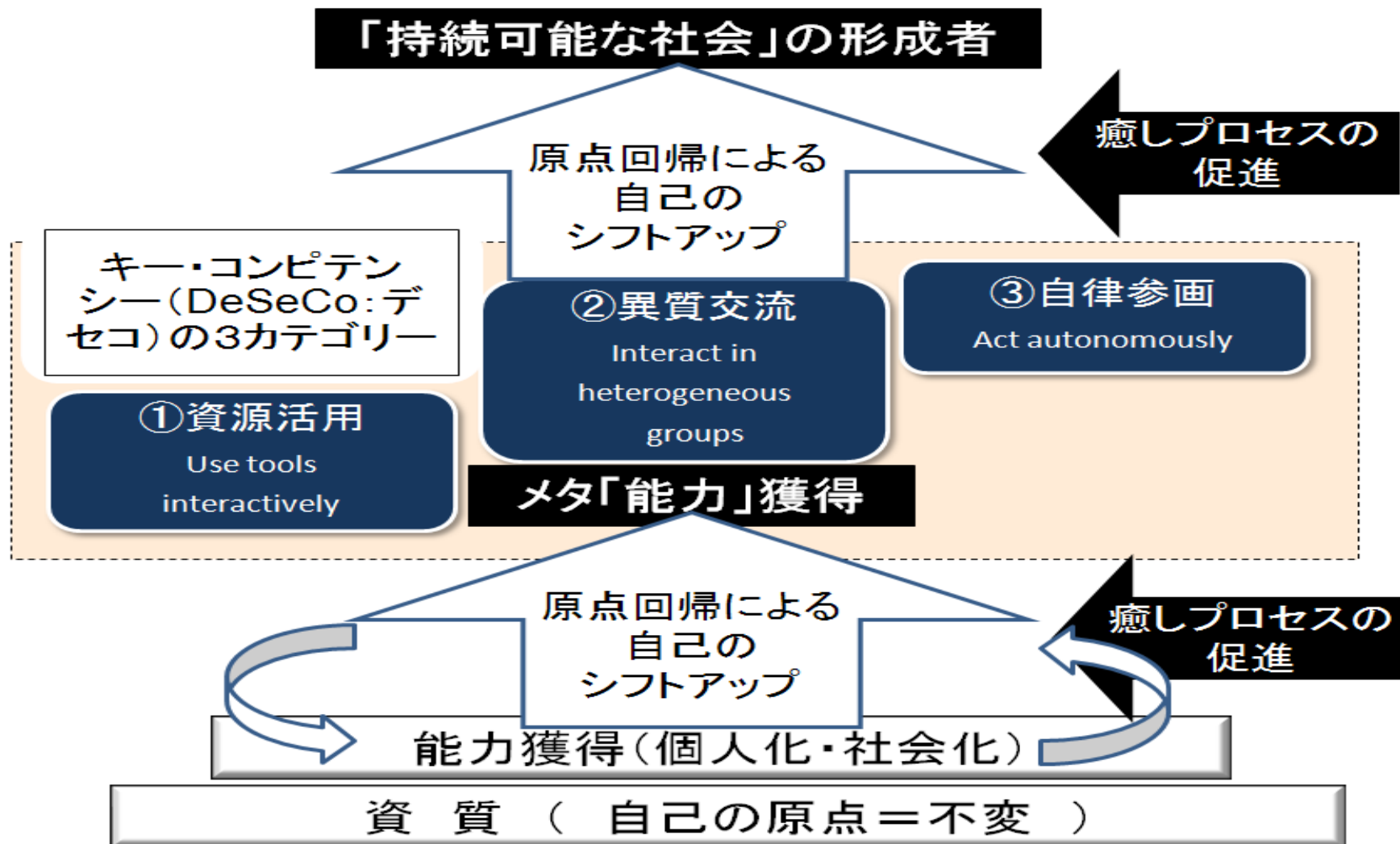
社会化から
参画力へ！

平和で民主的な国家及び社会の形
成者として必要な資質を備えた

健康：

心身ともに健康な国民の育成を図る。

「持続可能な社会」の形成者の育成と 癒しプロセス…促進＝進展+回帰



結論

「新しい公共」や「公共的課題（諸答申では「現代的課題」）の学習」の促進機能は、これまでの社会教育も発揮してきた。

しかし、それと同時に発揮してきた個人化や原点回帰の促進機能を、社会化促進と結合して効果的に発揮する点では十分ではなかった。

今後は、学習者の特性及び学習プロセスに対応して、社会化、個人化、原点回帰の諸機能を一体的に提供することによって、「持続可能な社会」の形成者としての能力獲得をより効果的に支援する必要がある。